

創立百三十周年記念英国旅行
「香蘭女学校ゆかりの地を訪ねて」

監 事
後藤 務

二〇一八年八月七日から一六日までの旅に参加いたしました。この旅は、維持後援会の企画として行われたものですが、当校の創立者であるビカステス主教、当校の英語名となっている聖ヒルダ、そして当校の精神と信仰のよりどころである聖公会（イングランド聖公会）、それぞれのゆかりの地、そして伝統に触れる旅でした。

ロンドン到着後、ホテルで既に英国入りされていた鈴木校長と清水先生と合流し、旅は始まりました。



初日は、カンタベリー大聖堂を訪れました。

西暦五九七年にローマから派遣された聖オーガスチンが最初に教会を建てて以来千四百年の伝統を持ち、常に信仰の中心にあり続ける大聖堂です。一六世紀の英国宗教改革を導いたトマス・克蘭マー主教もまたカンタベリーの大主教でした。その意味で、聖公会はここから生まれたと言っても良いでしょう。

現在は、二〇一三年からジャスティン・ウェルビー師が第百三代カンタベリー主教として、また全世界の聖公会のリーダーとして働いておられます。

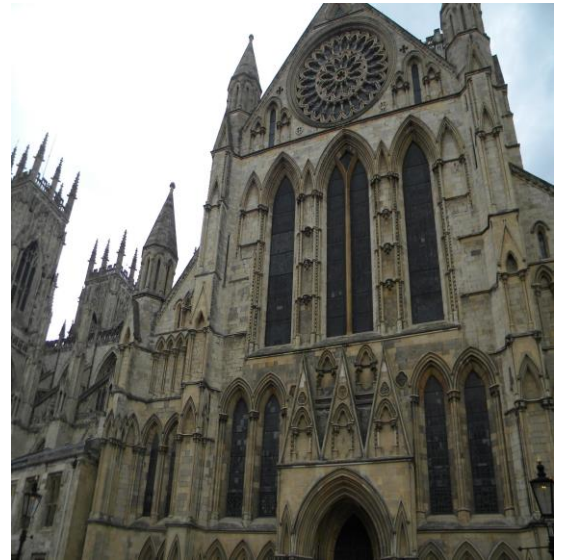
わたしたちは昼頃にカンタベリーに到着し、大聖堂に入りました。今回はこの聖堂の地下（クリプト）にある礼拝堂で平日に行われている十二時半からの聖餐式に参加しました。我々のように旅行者と、大聖堂近辺に住んでいると思われる人びと、およそ三十人程度の会衆と共に女性司祭司式による聖餐式が、周りに一般の見学者のいる中で献げられました。地下空間という独特のスペースから生み出される静寂さと長い祈りの伝統に裏付けられた、敬虔さに満ちた大げさなものではないけれど何とも言えない荘厳さの中で礼拝をする貴重な経験をしました。礼拝後、大聖堂を見学しそのすばらしさに触れることができました。



昼食後には、聖オーガスチンが最初に建てた聖堂と修道院跡を訪れました。彼はローマ帝国の撤退によって一度は消えかけたイングランド中央部から南部のキリスト教（アイルランド、スコットランド、イングランド北部には修道院を中心としたケルト系と言われるキリスト教が残っていた）の布教のためにローマ教皇グレゴリウスによりこの地に派遣され宣教を開始し、それが現在の教会まで繋がっています。現在は、ほんの一部の壁と土台の石積みの部分が残っているだけですが、それでもそこに立つと往時の姿を思い浮かべることができるように思うと同時に、その綿々とした歴史が現在の当校まで繋がっていることに感慨深い思いでした。



二日目は、ヨークに向かいました。午後三時前に到着し、その後、町歩きとヨーク・ミンスター（ヨーク大聖堂）を見学しました。ヨーク大聖堂は、ヨーク大主教の主教座がありますが、ヨーク大主教は教皇インノケンティウス六世（一三五二～六二）の時代以来、カンタベリーに次ぐ地位を持ち、現在はウガンダ生まれのジョン・センタム師が素晴らしい働きをしておられます。建物は現在、内部も改修中で一部見ることのできない部分もありましたが、それでも美しく、素晴らしい聖堂でした。その後、中世に作られた城壁の上を散歩し、様々な角度から見る大聖堂を楽しみ、大聖堂周辺を散歩してホテルに戻りました。



三日目は、ヨークを出発し、校名となっている聖ヒルダゆかりの地であるウィットビーを訪れました。ヨークを車で出て、ウィットビーに近づくと、そこには一面薄紫色に染まり、所々羊が放牧される、広大なヒースの荒野が広がります。その景色は雄大そのものです。そのただ中を抜けていくと丘の上から、ウィットビーの町、聖ヒルダの修道院跡、そしてその先に広がる海が見えてきてウィットビーに到着しました。



最初に聖公会の女子修道会である、「聖霊女子修道会 本部 聖ヒルダ修道院」を訪れました。この修道院は、一九一五年（大正四年）から現在に至るまで、様々な活動を行ってきており、現在はありますが、かつては学校を持っていました。当校の英国研修旅行の初期の時代にはここを訪れ、宿泊したこともあるので、卒業生の中には憶えていらっしゃる方もおられるのではないのでしょうか。以前当校が訪れたことをよく憶えておられる二人の修女さんとお話をした後、修道院を見学させて頂きました。落ち着いた礼拝堂、素晴らしい庭園、そして宿泊施設、を持つ静かで美しい修道院でした。今は、現在の建物の後ろに新しい建物を建築中であり、年末までに完成しその後引っ越しされるとのことでした。お昼になったため、修女さん達とご一緒に昼食に招かれ、修道院

伝統のサイレント・ミール（沈黙の中で

の食事）をご一緒いたしました。食後に、修道院の霊母様と皆さんとご挨拶をさせて頂きました。温かく迎えて頂き心より感謝です。



このような素晴らしい修道院をできれば当校の生徒にも是非体験して頂き、普段目にする英国のものとはひと味違う伝統を体験して頂ければ、と強く思いました。

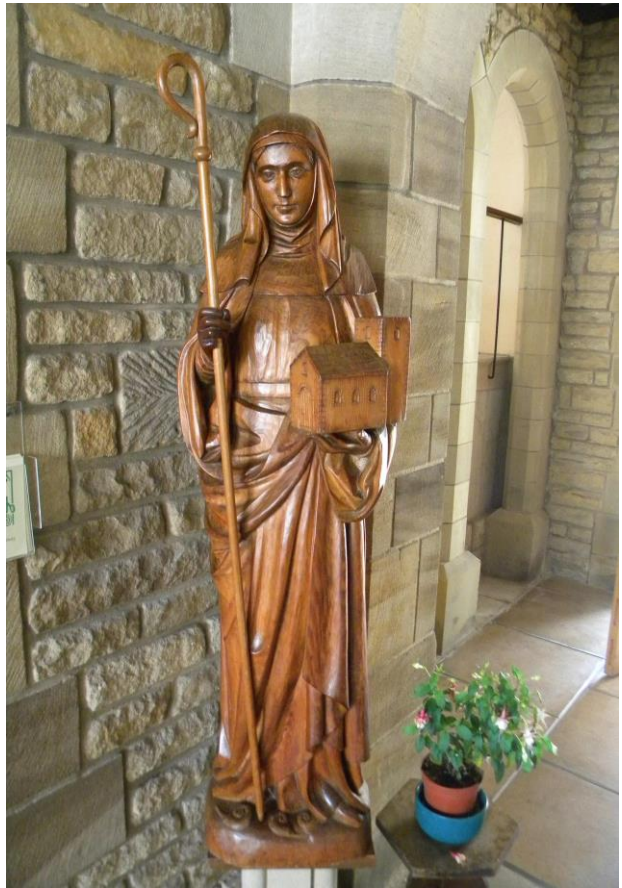


その後、岬の上に立つ聖ヒルダが修道院長をしていた修道院跡を訪れました。ノーサンブリアの王エドウィンの甥の娘として生まれたヒルダは一三歳の時洗礼を受け、何歳の時かははっきりしませんが、ハートルプールと呼ばれた修道院で二人目の修道院長を勤めた後、六五四年にノーサンブリア王国のオスウィ王によりこのウィットビーに建てられた修道院の院長となりました。この修道院は男子、女子両方の修道院でした。ヒルダ

の正義、敬虔、純潔、平安、隣人愛のルールに厳密に従い生活していましたが、彼女の思慮分別と良識が知られ、助言や相談のために王やその他の公の人びとが彼女を訪ねました。彼女の規律の下での生活は聖書を学び、良き業を熱心に行い、彼女のもとの五人の修道士は主教となり、少なくとも一人は更にローマに学びに行きました。またそのうちの一人ビバリーの聖ヨハネは聖人に列せられています。彼女に従うすべての人また彼女を知るすべての人はその傑出した敬虔さと恵みのゆえに彼女を「Mother（母）」と呼びました。晩年の六年間は難病にかかり高熱に襲われましたが、ヒルダは病気に対しても感謝をもって耐えました。そしてそ



の間も委ねられた人々を教えることを欠かさず、六八〇年一月一七日にヒルダは病の内にあった後、天に召されました。彼女は修道士に囲まれ、その最後の時、平和の福音を護るようにかれらを励ましました。当校創立者のビカステス主教は、このような聖ヒルダのイメージを香蘭女学校の生徒と重ね合わせ、この学校に係わる一人一人が少しでもヒルダに近づくような人となることを願っていたのではないのでしょうか。ヒルダの時代には小さな家に二、三人ずつ、また男子と女子が別れて生活し、礼拝は教会で一緒にするケルト様式の修道院だったと思われます。そのような修道院の跡ですが、現在残っている建物は十二世紀のベネディクト派の修道院の跡です。残っているのは外壁が主となっていますが、その中に立つとその当時の壮大な姿がわたしたちに迫ってくる建物です。



夕方にはヨークに戻り、ヨーク大聖堂の晩祷（イーヴンソング）に出席しました。今は夏休みで大聖堂の聖歌隊・オルガニストは休暇中のため、この日はブリストルから来た聖歌隊とオルガニストが奉仕をしていました。この晩祷はイングランド教会（特に大聖堂では）の最も伝統的かつ礼拝の一つの典型を示すもので数百年間ほぼ変わること無く献げられてきたものです。この日は平日のため聖歌は歌いませんでしたが、美しい詩編、アンセム、そして交唱が凜として大聖堂に響き渡る深く心に染みる格調高い礼拝でした。



四日目にわたしたちはイースト・アングリアと呼ばれる地方の古都ノーリッジを訪れました。

ヨークを出て、途中、これも十一世紀以来、正確には一〇九二年に建設されて以来、度重なる改修、修復を重ねながら九百年以上信仰の強い証し人として建ち続けるリンカーン大聖堂に休憩も兼ね立ち寄りしました。この大聖堂はヨーク・ミンスターに次ぐ大きさを持つ、これまた美しく壮大な建物です。聖堂内、古いライブラリーなどを見学、軽い昼食を取り、ノーリッジに向かいました。

ノーリッジに到着後、知人の紹介で、ノーリッジ・スクールを見学しました。この学校は、大聖堂付属の学校が元となっており、その歴史は一〇九六年にベネディクト会の修道院を含みつつ、聖堂の建築が始まったすぐ後にグラマー・スクールが設立されたとき以来、ほとんど千年の歴史を持つ学校です。

わたしたちはこの学校の日本で言えば事務長のような職責のミセス・チェリーを紹介して頂き、学校をくまなく、およそ二時間ぐらい案内していただきました。学校の建物はほとんど大聖堂の付属建物を利用しており、夏休み（英国では新学期開始前）ということで、沢山の工事をしてい



ましたが、古い伝統的な建物を上手に利用しつつ、新しい建物も加えながら、六

歳から十八歳の男女が学ぶ学校でした。ローア・スクール（日本で言えば小学校）のグラウンドだけでもサッカーコート三面ぐらいの広さがあり、シニア・スクールのグラウンドはまた別にあるということでした。生徒達は毎日、朝の礼拝を大聖堂で行っているそうです。大聖堂の聖歌隊で歌う子ども達は、皆この学校で学びながら、休みの期間以

外は大聖堂の晩祷、主日礼拝で歌います。またオックスフォード大学やケンブリッジ大学に進学する生徒もいる、かなりレベルの高い学校でもあるようです。この様な良き伝統と精神性、豊かな環境で学べる生徒達は本当に幸せだと感じさせられました。香蘭女学校も今までの良き伝統を維持しながら、このような質の高い学校形成を目指したいものだと感じました。また、夢物語かもしれませんが、この様な学校への留学ができたならば、それは留学生にとって一生の大きな財産になるように思いました。

五日目は日曜日でしたので、ノーリッジ大聖堂の主日礼拝に参列しました。この大聖堂は大きさはそれほどありませんが、その壮麗さは素晴らしいものがあります。ノルマン様式の三段の丸形アーチが垂直ゴシック様式で床から天井に一気に延び、天上のリブ（骨組み）の交わるころには趣向を凝らした天井飾りが付いています。そのような美しい聖堂で、多くの会衆と共に聖餐式を共にしました。この日はヨーク・ミンスターと同様に、この大聖堂の聖歌隊とオルガニストは休暇中でしたが、マンチェスターの北東に位置するプレストンという町から来た聖歌隊とオルガニストが奉仕していました。荘厳な中でも感じられる親密さ、聖歌隊の美しい響き、そしてオルガンの美しい音色と響きの中で多くの会衆と共に歌う聖歌、どれもが心を打つひとときでした。まさにイングランド聖公会の信仰的伝統を体感させていただきました。礼拝後は、しばしお茶を飲みながら会衆の皆さんと歓談の時を持ちました。日曜日でもあったので午後は参加者それぞれが自由に町歩きを楽しみました。



六日目には旅も終盤に近づき、ビカステス主教ゆかりの地を訪れました。ノーリッジから車で約二時間足らず南に行ったところにフラムリングムという小さな町があり、そこに聖ミカエル教会があります。ビカステス主教は、ケンブリッジ宣教団の責任者としてインドのデリーで働いていましたが、身体を壊し英国に戻らざるを得ませんでした。彼はインドに戻りたかったのですが、身体が状況が許さず、この教会の牧師として派遣されました。その牧会の様子やビカステス主教の宣教に対する姿勢などを、以前この教会の牧師であり、ビカステス主教の研究者でもありフラムリングム在住の、キャノン デイヴィッド・ピッチャー師にお会いして伺いました。ピッチャー師は、ビカステス主教が、深い祈りと敬虔さをもって、国内、国外を問わず、宣教地におけるキリスト教に基づく共同体の形成を願い、それを実現するための教会形成、教育などに熱心に取り組んだ姿を語ってくださいました。香蘭女学校はまさに主教のこの熱意に基づき作



こには城壁だけが残るフラムリングム城趾があり、休みの時期には観光客も訪れます。わたしたちも訪れ、城壁に昇り、一周しながら、領主になったかのような気分で周辺の典型的なイングランド田園風景を楽しみました。

その後、ケンブリッジに向かいました。



られたことをあらためて認識させられました。教会は決して大きくはありませんが、部分的には一二世紀に造られたものから、一六世紀のものまでが混在する小さいながら、美しい教会です。この地方は一五世紀以来、ハワード家のものであったため、その墓が教会内部にあります。主教の住んでいた牧師館も、現在は間借り人の住む住宅となっていますが、ピッチャー師が住人をお願いしてくださり、見る事ができました。

また、



ビカステス主教はケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジの出身です。



このカレッジは三一あるケンブリッジのカレッジの中で三番目の歴史を持つカレッジで、その設立当時の姿が残されている最も初期のカレッジです。到着したときはあいにく雨が降り出しましたが、ショッピングモールに車を駐め、歩いて行きました。全体としては、キングス・カレッジのような大きさと華やかさはありませんが、美しい庭を複数持つ、瀟洒な感じのカレッジでした。主にそのチャペルを見学しましたが、こじんまりとした簡素で落ち着いた感じの美しい礼拝堂でした。学期中にはここで朝・夕、祈りが献げられています。雨をよけながら、建物と庭を巡りました。基本的には内部に入ることはできませんでしたが、寮の大食堂は垣間見ることができました。その後、ロンドンに向け、二時間ほどでロンドンに戻りました。



七日目の最終日は、ロンドンから一二〇キロほど西にあるチセルドンという町にある、ピカステス主教のお墓に墓参しました。事前に棟近理事が連絡を取ってくださったおかげで、スムーズに関係者と会うことができました。ピカステス主教は、ランベス会議のためにこの地を訪れ、十日後に病により世を去りました。わたしたちは、主教の宿泊していた館（現在はホテル）、葬儀の行われた聖十字教会、そして最後に墓地を訪れ、献花し、案内してくださった英国の方と共に、墓前の祈りを献げました。この様なことで、予定通り今回の旅の目的を遂げることができました。少人数の旅であったことは残念でしたが、今回の旅を通じて、香蘭女学校百三十年の歴史に直接的に係わるものではありませんが、その設立以来、香蘭女学校の目に見えない背骨として学校を支えてきた、先達者達の熱意、また深い信仰的な伝統をあらためて心に深く感じる旅であったように思います。これからも機会があれば、是非皆さんが直接触れて、それを感じていただきたいという思いの強く残る旅でした。ご一緒していただいた、鈴木校長、棟近理事、清水由起子先生に改めて感謝しつつ、わたくしの拙い文章を終えたいと思います。



以上

